李箕永の仏教研究と韓国現代仏教学

孫　知　慧

Lee Gi-Young on Buddhism and Modern Korean Buddhist Studies

SON Ji Hye

This paper introduces Lee Gi-Young (李箕永, 1922-1996), Korea's pre-eminent modern Buddhist scholar, who studied Buddhist research methodologies under Étienne Lamotte (1903-1983) at Leuven University in Belgium in the 1950s. Bul-Yeon reestablished research methodologies for Korean Buddhist studies in the modern era; he is the leading scholar on Won-hyo (元曉, 617-686), a famous high priest in the seventh century. Bul-Yeon devoted himself to the creative interpretation of the Sutras and practical Buddhist activities; "piety and seeking the truth," which is considered contrary to "historical empirical studies focusing on objectified literature," and yet which is fused in Bul-Yeon. The paper addresses the introspective nature of Buddhist studies today, the lack of practice and faith in Buddhism worldwide, and implications for Buddhist studies and the practices of Bul-Yeon Lee Gi-Young.

キーワード：李箕永、元曉、韓国仏教、在家仏教、西洋仏教学

一　はじめに

本稿では、韓国近現代の代表的仏教学者である李箕永（号は不然、1922-1996）について紹介し、実践と信仰が欠如しているといわれる今日の仏教学に対する問題意識を踏まえた上で、李箕永の仏教研究と実践が持つ示唆点を検討してみたい。

李箕永は、近代以後の韓国仏教学の研究方法論を確立し、特に古代東アジア仏教界の著名な高僧であった元曉（617-686）研究の第一人者として知られる。彼は、1950年代に当時の韓国学者としては珍しくベルギーに留学し、仏教研究の世界的権威者であるラモット（Étienne Lamotte、1903-1983）の門下で修学した。帰国後は「元曉と仏教研究」に着手し、多くの後学を養成して現代韓国仏教界の基盤を構築した。これ以外にも、在家仏教の活性化、韓国仏教研究院など研究機関の創設、東西洋宗教間の対話、膨大な著述刊行など、数えきれないほど仕事を情熱的に推進した彼は、まさに韓国仏教界に並ぶ者のない巨匠として認められている。さらに仏教学術史的観点から見れば、彼の仏教学には「近代西洋仏教学とアジア仏教伝統の出会い」という課題が含まれている。彼にはこの問題を解決しようとする苦悩が誰よりも如実に窺える。

ところが、これまで李箕永に関する研究は少ない[1]。現在の韓国仏教界に残っている彼の影響力に比べると、彼の活動や業績は十分に明らかになっていない。したがって、このような問題意識に基づき、今後の李箕永評価のために必要な試論的考察として、その生涯・研究・実践・示唆点などを整理することにする。

二　李箕永と仏教研究の開始

1　李箕永について

李箕永は1922年２月20日、現在北朝鮮にあたる場所である黄海道鳳山で生まれた。その後、京城帝国大学で東洋史を専攻し、卒業後は暁星女子高校の教師になった。1954年にはカトリック教壇の支援を受けて西洋中世史の研究を目指し、ベルギーのルーヴェン大学に入学した。そこで当時仏教研究の世界的権威者であったラモット（Étienne Lamotte、1903-1983）と出会い、まもなく仏教研究を開始することになった。1960年には仏教哲学研究「Aux origines du Tchan Houei懺悔, Aspects Buddhitiques de la Pratique Penitentielle」で博士学位を取得した。

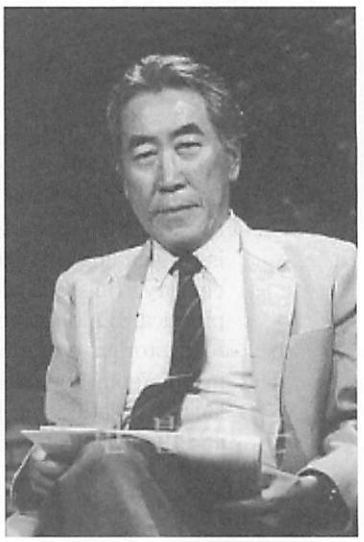

写真１　李箕永[2]

1960年帰国してから（大韓仏教曹溪宗立大学）東国大・ソウル大・嶺南大などで教授として勤めながら元暁研究に着手し、ほとんど40年ほどこれに没頭した。1974年から韓国仏教研究院、求道会、元暁学堂、在家仏者会を創設し、在家仏教の育成と仏教普及に献身したが、1996年11月９日の学術会議「仏教と国家」の途中で急逝した。

表１　年表[3]

1	1922	黄海道 鳳山郡 万泉面 楡亭里で誕生
(1922-1954)	1941-43	京城帝国大学 予科 修了（文科 乙類）
留学以前	1943-44	10月 京城帝国大学 法文学部 史学科入学（学兵（日本へ）学業中断）
	1949	李泰恵と婚姻
	1951-53	国防部 副編修官として6.25戦史編纂に従事
	1952-54	大邱 暁星女高等学校 教師

1）2011年12月10日、李箕永15周忌追慕記念国際学術会議「東アジア仏教における近代性と不然李箕永の仏教・仏教学」が開催されており、韓国仏教研究院による『不然李箕永全集』刊行などの作業はいまも続けられている。しかし、李箕永の活動や業績に焦点をあてて体系的に整理した研究論文はきわめて少ない。

2）李箕永『元暁思想70講』、韓国仏教研究院、1992年。

3）鄭柄朝の「먼 길을 떠난 이에게」（『내 걸음의 끝에 마음이 있나니』、韓国仏教研究院、1997年、323頁）の記述を参照し、それを補完して表として作成したものである。

2 (1954-1960) ベルギー留学	1954 1954-60 1955 1960 1960	ベルギー ルーヴェン大学 入学 ベルギー ルーヴェン大学（史学・哲学）・パリ大学（哲学科）修学 東洋学研究所のÉtienne Lamotte（1903－1983）との出会い ルーヴェン大学で哲学博士学位取得、学位論文「Aux origines du Tchan Houei懺悔. Aspects Buddhitiques de la Pratique Penitentielle」 帰国
3 (1960-1974) 帰国後1	1960.4-1969.8 1967 1969-72 1970 1972-73	東国大学校の講師・専任講師・助教授・副教授・教授・印度哲学科主任・教養学部長・仏教大学長を歴任。ソウル大学校で宗教学、仏教学、人類学を講義。西江大学校で宗教学、弘益大学校で美術史学など講義 『元晩思想』（円音閣）刊行：1968年ソウル市文化賞、1970年ユネスコ 韓国委員会が選定した「解放25年韓国10大名著」に選ばれ海外に紹介。 嶺南大学 教授、新羅伽倻文化研究所長、教養学部長。 フルブライト交換教授としてアメリカlasalle大学、Wake Forest大学で元晩思想を講義 国民大学 学長
4 (1974-1987) 帰国後2	1974 1974 1974-77 1978-81 1981-96 1982 1984 1985 1987	韓国仏教研究院を創立、基礎課程・研修過程、各種講座と学会を開催 『韓国の寺刹』（日誌社、全18冊）など、学術書籍を執筆・出版 東国大学校印度哲学教授として復職 韓国仏教研究院付属求道會創立（ソウル・大邱・釜山） 韓国情神文化研究院派遣勤務 首席研究員、第 3 部長 招待編纂部長として『民族文化大百科事典』刊行の土台構築。 財団法人大韓仏教振興院の理事 還暦記念論文集『韓国仏教研究』刊行 国民勲章木蓮章褒賞 韓国仏教研究院学術誌『仏教研究』創刊 東国大学校停年退職
5 (1987－1996) 退任後 (末年)	1987-90 1988 1988 1989-96 1990 1994 1995 1994-96 1995-96 1996 1996 1997	東国大学校特待教授として慶州キャンパスに出講、新羅文化研究所長 韓国仏教研究院 附設「元曉学堂」創立 韓国仏教研究院 社団法人認可・理事長就任 財団法人 仏教放送 理事 韓国仏教研究院 光州 求道会 創立 『元晩思想研究』 1 刊行 仁村賞（学術部門）授賞 韓国在家仏教会議 共同議長 京釜高速鉄道 慶州通過白紙化推進委員会長、慶州保存運動 霞城学術賞 授賞 韓国仏教研究院主催「仏教と国家」国際学術会議の途中で急逝 第 1 回 万海賞（学術部門）追敍

李箕永の代表的著書としては『元晩思想』『釈迦』『維摩経講義』などがあり、論稿は約1000篇にのぼる[4]。韓国仏教研究院は、李箕永が残した著書・訳書・論文・法話・講演・記事・エッセーを網羅し、すべて集めて全集として刊行してきた。すでに20巻以上刊行されたが、まだ完結していない。その『不然李箕永全集』のリストは次のとおりである。

4）李箕永の研究業績に関しては『元晩思想研究Ⅱ』（韓国仏教研究院、2001年、573-583頁）を参照されたい。李箕永は、熱情的な著述家として多くの著述を残した。著述と訳書を含めて66余巻、論文は 138余篇である。分類すると、訳書 11巻・編著 5 巻・共著25巻・博士学位論文 1 篇・訳解及び講義書24巻、そして多数のエッセイなどがある。 論文を含めすべての論稿を集めると 1000篇にのぼる。

表2　不然李箕永全集リスト[5)]

1＊元晩思想―世界観（1967）	20韓国の仏教思想（1976）
2＊元晩思想70講―夜明けの日光が語る意味（1991）	21証道歌，十牛図
3元晩思想研究Ⅰ（1994）	22＊真心直説（2001）
4＊元晩思想研究Ⅱ（2001）	23金剛経，般若心経（1978, 1979, 1996）
5＊韓国仏教研究（1982, 2006）	24＊仏教概論講義（上・下）（1998）
6韓国の仏教	25＊維摩経講義（上・下）（2000）
7 Aux origines du Tchan-houei（懺悔），Aspects bouddhiques de la pratique Penitentielle（1960）	26＊勝髪經講義（2002）
8＊釈迦（1964, 1999, 2006）	27法華経講義
9宗教史話（1978）	28＊大乗起信論講義（上・下）（2004）
10仏典解説（1978）	29攝大乗論講義 11
11＊仏教と社会（1977, 1999）	30＊臨済録講義（上・下）（1999）
12＊思索人の念珠（1977, 1999）	31伝燈録講義
13＊一つの意味（1977, 1999）	32＊無門関講義（2000）
14心の哲学（1987）	33＊涅槃宗要講義（2005）
15永遠に一つになる道（1987）	34無量寿経講義
16星のように月のように太陽のように（1991）	35元晩思想講義Ⅰ
17＊私の歩みの執着は心に－李箕泳教授の人生と思索（1997）	36元晩思想講義Ⅱ
18＊（書き直す）韓国仏教維新論（1998）	37upaniṣad講義
19金鋼三昧経論（1972, 1996）	38老荘思想講義

戦後の混乱期、仏教研究の学風も定まっていなかった1960年代初めに、韓国仏教界に登場した李箕永は、ベルギー留学を通じて習得した西洋哲学、神学、史学、文献学の方法論を仏教研究に適用し、大きなセンセーションを巻き起こした。彼の直弟子は80名余りにのぼり、韓国の仏教研究者の間でその著述が基本テキストになったことは言うまでもない。彼の元晩研究の影響により1970年代から元晩研究者が急増し、その講義は爆発的な人気講義になった[6)]。当時その影響を受けた弟子たちは、みな一様に彼の仏教研究が韓国仏教学界「新しい方法論の定立」をもたらしたと高く評価する。

2　仏教学入門の契機：エティエンヌ・ラモットとの出会い

ここで注目すべきことは、李箕永の人生のターニングポイント、つまり仏教研究への決心とそのきっかけである。カトリックを信仰した李箕永は、盧基南（1902-1984）大主教の仲介でカトリック教団の支援を受けることになり、1954年7月、西洋中世史の研究を目指しルーヴェン大学に留学した。次第に民族文化というものに関心を持つようになった李箕永は、1955年10月、ラモット教授が務めていた東洋学研究所（L'institut Orientaliste）を尋ねた。ラモットは初対面の李箕永に「あなたの国には元曉という

5）求道会ホームページ（http://www.bwa.kr）参照。括弧の中は初刊年、＊をつけたのは、すでに刊行された書である。

6）韓国仏教研究院長の李珉容によると、当時ソウル大学校文理大学の三大人気講座は①李箕永の仏教概論、②朴鍾鴻の哲学概論、③韓泰淵の憲法通論であったという。

優れた思想家があるのに、どうしてここまで来て西洋哲学を研究しようとするのか」と質問を投げたという[7]。

突然の質問にとうわくした李箕永は、これをきっかけにみずからのアイデンティティについて熟慮するようになり、やがて韓国の歴史と不可分の関係にある仏教をまず理解する必要性に気づいた。その後彼は、ラモットの授業に出ながら仏教研究を開始した。ラモットは当時、印度仏教学とサンスクリット文献の解読における世界的権威であった。漢文と日本語が堪能な東洋人留学生である李箕永に対するラモットの好意も格別であったという。ラモットのアパートを講義室にして漢訳大蔵経とサンスクリット、パーリー、チベット語の原典を互いに対照しながら解読するという学習を続けた[8]。李箕永は、ラモットのもとで仏教文献解釈や仏教研究方法論を学び、六年間の留学の結実としてカトリックの悔改と贖罪にあたる仏教の懺悔を研究した「Aux origines du Tchan Houei懺悔, Aspects Buddhitiques de la Pratique Penitentielle」(1960) を執筆し博士学位を取得した。

1960年の帰国後李箕永は、東国大学印度哲学科で教鞭をとる一方、元曉研究に着手し、これに生涯を捧げた。次の文は李箕永が恩師ラモットの影響で仏教学と元曉研究に目を開くようになったことを述べたものである。

> 私の仏教研究は恩師Étienne Lamotte教授と出会ってから始まった。しかし彼が私にとって誰にも変えられない大恩人だったことを明確に知ったのは、彼が死去した後であった。彼にもっと近くに師事して学び、問うこともできなくなった今、まさに彼が残した正確で豊富な膨大な研究書を精読してからである。……私は経典と論書を読みながら、その中で自分なりにもっとも気に入った経や論を選び関心を示してきた。それは私がヨーロッパにいた時、まだ元曉の著述を綿密に検討する前のことだった。ところが帰国後、元曉の著述を検討してから私の選択が元曉の選択とも一致していることを見て、改めて元曉を欽慕する心がもっと篤くなった。しかも、さらに驚いたのは、ラモット先生が関心を示した幾つかの経典も元曉が重視した経典や論書と一致している、という事実であった……『維摩経』もまさにそのような経典の中の一つである[9]。

この引用から、李箕永の「仏教と元曉研究」においてラモットという人物がいかに決定的な役割を果たしたかがわかる。そこで、ラモットという人物について簡単に紹介しておきたい。

---

7) 李箕永は次のように回顧している。ルーヴェン大学に入学後2学期目にラモット教授のもとを訪ね、これまでの心の彷徨や悩みを打ち明けると、ラモットは老眼に微笑を含んだ顔で「あなたはどこを駆け回っていて、今やっとここを尋ねて来たのか」と、まるで待っていたかのように喜んで迎えてくれたという。(李箕永『내 걸음의 끝에 마음이 있나니』、韓国仏教研究院、1997年、151頁、253頁)。

8) 李箕永の友人であるHubert Durt（東京国際仏教学大学院大学）によると、留学時に李箕永は主に西洋中世史およびl' Institut superieur de philosophieでスコラ哲学・現代哲学を学び、さらにラモットから仏教学を学んだという（李箕永『내 걸음의 끝에 마음이 있나니』、韓国仏教研究院、1997年、317頁)。

9) 李箕永(訳解)「序文」『維摩詰所説経』、韓国仏教研究院、1994年。

写真2　1982年 李箕永とラモット―ラモットの部屋で[10]

3　エティエンヌ・ラモット（Étienne Lamotte）

エティエンヌ・ラモット（Étienne Paul Marie Lamotte、1903-1983）は、1903年ベルギーのディナン（Dinant）で生まれた。彼は、カトリックの神父でありながらも仏教研究に一生を捧げた人物であり、Louis de la Vallée Poussin（1869-1938）やPaul Demiéville（1894-1979）といったフランス仏教学の正統をつぐ大家として、ヨーロッパ仏教学の中に枢要な地位を占めると評価される[11]。

ラモットは、1929年ルーヴェン大学で「Notes sur la Bhagavad-Gita」により文学博士学位を取得し、当時の最高の印度仏教学者の一人であったPoussinの弟子としてともに仏典研究に尽力した。その後ルーヴェン大学の東洋学部の教授となり、仏教古典語であるサンスクリット、チベット、パーリ語に精通していた。のみならず、漢文経典にも該博な知識を持っており、漢文に弱かった当時の西洋学者たちが犯しやすい誤謬を克服する研究を目指した。

ラモットの訳書の特徴としては、厳格細密な訳文と註釈が高く評価されている。彼の訳書の註釈に参照された資料の量と質は、百科事典の一項目あるいは一篇の専門論文の水準に達するとされる。また、その経典解釈学は「正確性」を追求すると同時に文字主義的解釈を超えて「真理の伝達という実践的意味」に重点を置いているといわれる[12]。仏教をある種の収集作業や翻訳、校訂だけを客観化して研究した当時の一般的な西洋の仏教学者とは違って、求道的信念と所信をもって経典翻訳と解釈にとりくんでいたのである。

このような態度は、李箕永が帰国後、文献学一辺倒の学者たちとは違い、「机の上の字としての仏教」ではなく「求道と実践」の仏教を提唱し維持してきた原動力になっただろう。この点は、李箕永が、ラモット自身の哲学のモデルとして菩薩行と在家仏教の象徴的人物である「維摩（Vimalakirti）」と『維

10）李箕永『내 걸음의 끝에 마음이 있나니』、韓国仏教研究院、1997年。

11）ラモットは1931年から1933年まで、当時「東洋学と仏教学の黄金時代」と言われたパリに行くことになった。ラモットが受けた学問的影響としては、Sylvain Lévi（1863-1935）から印度学・仏教学を学び、Louis de La Vallée Poussin（1869-1938）からは仏教学・印度学を、Paul Demiéville（1894-1979）からは中国語・漢文を、Alfred Foucher（1865-1952）からは梵語を学んだ。

12）정희수「Etienne Lamoteの生涯と彼の仏教学」『米州現代仏教』73号、1996年6月。

摩経（Vimalakirtinirdesa)』を重視した点を強調し、ラモット―維摩―元曉とみずからの求道的志向点を連結しようとしたことからも分かれる。

一方、ラモットの名著『印度仏教史（*Histoire du Bouddhisme indien, t. I : Des origines à l'ère Saka*』（*Louvain*、1958）は、今でもこれを乗り越える概論書がないと評されるほど、初期インド仏教研究者の必読書となっている[13]。これ以外にも1944年から1980年にわたって刊行された『大智度論』の訳註 Le traité de la grande vertu de sagesse de Nāgārjuna（Mahāprajñāpāramitāśāstra）は、総5冊の畢生力作であり全世界の注目を引いた。特に漢訳に自負心を持っていたアジア仏教学者たちに非常な衝撃を与えたという[14]。

ラモットは高位聖職に上った神父であったが、仏教学の巨匠でもあった。同じく李箕永も、カトリック信者の家に育ち教団の支援を受けて留学したが、ラモットと出会って韓国の著名な仏教学者となった。この出会い自体に、宗教間の偏向性と排他性を乗り越えることを強調した二人の学問的旅程が、そのまま反映されていると言えよう。李箕永の研究方法にはラモットの影響が色濃く残っており、またラモットの研究に対する省察と関心を常に抱いていたことも彼の論稿や講演に見られる。とりわけ李箕永は帰国直後、1964年ラモットの論稿*L'Enseignement de Vimalakirti*を翻訳し、1994年には生の最後の著作『維摩詰所説経』を刊行して[15]、1996年に他界した。このことは、李箕永の研究者としての生涯に、ラモットが強い影響を及ぼし続けていたことを意味する。

三　李箕永の仏教学研究

1960年、ベルギーから帰国後、李箕永は本格的に仏教研究に着手し、当時の韓国仏教界に新風を巻き起こした。彼の仏教研究の特徴は大きく ①仏教文献翻訳と解釈の方法論、②元曉研究、③比較研究に分けることができる。

1　仏教文献（テキスト）翻訳と解釈の方法論

1900年代の初期から韓国仏教界は、他の東アジアに諸国に先がけ西欧仏教学を受け入れた日本に留学生を派遣し、日本を通じてヨーロッパの文献学的仏教研究やサンスクリット、チベット語による原典解釈などに接することができた[16]。もちろん金法麟（1899-1964）や白性郁（1897-1981）のように直接フラ

13）『印度仏教史』は、僧侶浩真によって八年にかかる作業で、2006年、韓国語訳が時空社から刊行された。ちなみに、ラモットの蔵書は1984年 4月、日本の l'Institut Oriental Italien de Kyotoと l' ecole Francaise d' Extreme-Orient、この二つの研究所に一部寄贈された。

14）この訳書は、全100巻である『大智度論』の前半部分 1 -30巻のフランス語訳註書であり、未完成作である（山口益『フランス仏教学の50年』、平楽寺書店、1954年）。

15）①E. Lamotte（Ki Yong Rhi（Translation).『E.Lamotte's L'Enseignement de Vimalakirti』,『仏教学報』3, 東国大学校仏教文化研究院, 1966年 ②李箕永（譯解）『維摩詰所説経』、韓国仏教研究院、1994年。③李箕永『維摩経講義』上、『不燃李箕永全集』第25巻、韓国仏教研究院、2000年。

16）近代仏教学の創始者と言われるのはフランス大学のサンスクリット担当教授であったEugne Burnouf（1801-1852）であり、その弟子であるMax Muller（1823-1900)、そしてMullerからサンスクリット語と印度学を学んで帰国した

ンスやドイツに留学した例もあったが、ほとんどは日本留学生として近代仏教学に接した。特に日本仏教文献学の金字塔と呼ばれる『大正新修大蔵経』(1924-1934) とパーリ語原典を翻訳した『南伝大蔵経』(1935-1941) の成果に韓国仏教留学生たちは深く傾倒した。急増した韓国の留学生たちは、東洋大・京都大・日本大などで文献学言語学的仏教方法論やサンスクリットチベット語などを学んだ。

当時、日本留学第一世代の仏教学者である金敬注、許永鎬、文瑛善、金泰洽らは、帰国後も長い間、韓国仏教の代表機関の長として後学を養成する影響力のある人物であった。彼らの大部分は日本に学んだ仏教研究方法論を韓国仏教界に紹介しようとした。たとえば許永鎬の「(梵漢朝對譯) 能断金剛般若波羅蜜経註釋」(『仏教』 6、仏教社、1937) のようなサンスクリット訳とインド仏教研究は、日本留学という経験なしには成り立ちえなかったであろう。

ところが、韓国戦争 (1950-1953) の後、韓国仏教界に起こった親日仏教 (帯妻僧) の清算や曹渓宗による禅風復旧運動によって、日本留学第一世代の近代的仏教学はそれ以上発展することが難しくなった。もちろん、李箕永が帰国した1960年代にあっても、韓国では漢訳経典だけに頼って経典を解読するという風潮が当然視されていた。韓国語訳さえ十分になかったし、文献批判という領域自体も脆弱であった。このような時に李箕永は、みずから留学の時に学んだ文献学・神学・哲学などの比較学的観点を韓国仏教学に適用し始めた。こうした試みは当時の韓国仏教界においては不慣れなことであったが、李箕永の講義を聴くため多くの後学が集まってくるとともに大きな反響を呼び起こした[17]。

1) 経典翻訳と原語理解の重視

特に李箕永は、仏教勉強の基本は「経典を精読すること」から始まると強調したが、これは彼の師であるラモットの影響にもとづく信念である。彼は経典を最初から最後まで繰り返して読むことを人々に勧奨した。彼の経典研究の特徴をまとめると次のようになる。

李箕永は経典翻訳において「原語 (text language)」の重要性を繰り返し強調した。李箕永は可能な限り漢訳本・サンスクリット本・チベット本・韓国語本を同時に提示し、漢訳本だけでは円滑な解釈ができない部分を詳細に対照検討し、原義の追究を奨励した。

> 漢文は元々印度語とは言語構造が異なるため、曖昧ではっきりしていない部分が多くあります。とりわけ鳩摩羅什の翻訳には単純化された表現が多いので、玄奘の翻訳やチベット語の翻訳も参照する必要があります。私の恩師ラモット教授がチベット本をフランス語に翻訳し、また他のいわゆる漢文本と厳密に対照して刊行した本がありますが、それはかなり役に立ちます[18]。

南條文雄 (1849-1927) から日本仏教界の印度仏教研究は始まった。明治期日本の東京帝国大学の印度仏教研究は南條文雄と高楠順次郎 (1866-1945) らが主導していたが、大正時代になると次世代の学者として木村泰賢 (1881-1930) と宇井伯寿 (882-1963) が活躍した。韓国の仏教徒は、このような学問的流れを日本留学で直接に感じており大きな影響を受けた。

17) 当時李箕永の下で仏教学を学んだ弟子たちは現在、韓国仏教界の核心的地位にある。韓国仏教研究院院長の李珉容 (1941-)、金剛大学総長の鄭柄朝 (1947-) が代表的な例として挙げられる。

18) 李箕永『維摩経講義』上,『不燃李箕永全集』25、韓国仏教研究院、2010年。

2）他言語の翻訳の活用（対照・敷衍）

李箕永は漢訳だけでは意味が通じない部分については、サンスクリット・チベット語訳、そしてラモットのフランス語訳も参照しながら翻訳、解釈した。次の文章はラモットのフランス語訳を参照した一例である。

> 觀於 無我하되 而誨人不倦하고
> 그러나 포기하지 않는다. (사람들에게 게으름 피우지 말라고 가르친다.)
> (na tu anatman utsṛjati, il ne rejette pas le moi) [19]

李箕永は多様な言語を活用した東西仏教学者の仏書翻訳を紹介し、お互いの差を指摘する方法を通じて読者の理解を助けようとした。次は元暁の『涅槃宗要』を解説した『涅槃宗要講義』[20] の例である。

> Paul Demievill教授が翻訳する時に「without passing of time」「시간을 보냄이 없이, 그냥 즉각」と言いました。Immediately、即時であります。それが即刻的であるから頓悟というのであります。Daisetz Suzuki（鈴木大拙）は、本覚を「enlightenment a priori」、つまり「本来부터 있던 先験的인 覚」といい、始覚は「enlightenment a posteriori」「나중에 얻어진 覚」と訳しています。A priori と A posteriori は「先得、後得」といいます。

3）現代人の理解を考慮する構成と翻訳（表題・段落・用語）

李箕永は仏書を韓国語に訳す祭、できるだけ多くの人々が経典を理解できるよう平易な現代語で解説した。彼の『維摩経講義』もまたラモットの方式を模範として、元来なかった表題をつけており、漢文原文も段落を区分した後に番号を付して経典の文脈を理解しやすく配置した[21]。

4）テキストと読者の疎通

李箕永の経典解釈において何より注目されるのは、テキストを読むことが「現実問題」と強く繋がりを持っている点である。彼はコンテキストとテキスト、現実とテキストを絶えず結びつけながら話題を投げる。そして多くの訳書を対照する精緻な過程を通じて「原典の意味を活かすこと」に重点を置き、解釈においては原著者の意図をふまえつつ読者みずからが創造的に解釈することを強調した。つまり文献を自分なりに消化したら、その後は「哲学すること」「思惟すること」を勧めたのである。

> 今日では、人生全体の問題を話すよりも、ある狭い小さな問題を論理的かつ体系的に問いただすこ

19）李箕永（訳解）『維摩詰所説経』、韓国仏教研究院、1994年、323-325頁。（文と植「不然李箕永先生の仏教学方法論について」『仏教研究』31号、韓国仏教研究院、2009年、174-175頁から引用）

20）李箕永『涅槃宗要講義』韓国仏教研究院、2005年、103頁。

21）「1994年判『維摩詰所説経』序文」の『維摩経講義』上、『不燃李箕永全集』25、韓国仏教研究院、2010年。

とのみを哲学者であると思っています……みなさんは体験の中から体得するのがどんなに貴重なことなのかを既に知っておられるから、繰り返し（維摩経を）読む中で、維摩の精神や維摩の思想と哲学がまさにみなさん自身の哲学になり、みなさんが自分なりに解釈を加え独創性を持つようになることを願っています[22]。

李箕永にとって経典とは、決して収集・編集・校訂のための学問的道具の意味だけではなかった。彼は文献の著者や成立史よりも、文献の中にある教えの本質に関心を注ぐ解釈者の面貌をより強く持っていたといえる[23]。

2　元暁研究

元暁は新羅年代の高僧であり、彼の著作『大乗起信論疏』『金剛三昧経論』などは東アジア仏教界に大きな影響を及ぼしたが[24]、崇儒抑仏の李朝時代を経る中で元暁の多くの著書は失われ、彼の行績も忘れられるようになった。しかし、近代の朝鮮知識人が明治期の日本仏教界において流行していた仏教統一論と結びつけて、元暁を通仏教の象徴人物さらには民族英雄として揚げ始めたが[25]、とはいえ一般人にとって元暁は、中国（唐）に留学に行く途中、骸骨水を飲んで得道した不思議な民間説話の主人公ぐらいにしか認識されていなかった。

しかし李箕永は、元暁の生涯と思想はもちろん、その論書につき学問的研究が至急であると強調した。こうして本格的な元暁の著作と思想に間する学問的接近が成立し始めたのである。

1960年代当時、仏教学専攻者であった私たちにすら元暁はただ骸骨水を飲んだ説話に登場する僧侶にすぎませんでした。そんな元暁を韓国が生んだ世界的学者として作り出した人がまさに不然（李箕永）先生でした。先生の号である不然も「不然之大然矣」という『金鋼三昧経論』の句から取るほど、元暁は先生にとって全生涯を貫く対象でした[26]。

22）李箕永『維摩経講義』上、韓国仏教研究院、2010年、358頁。

23）全浩星「テキストと現実の解釈学籍循環―不然李箕永の元暁解釈学」『仏教研究』第26号、韓国仏教研究院、2007年、105頁。

24）元暁（617-686）は、韓国新羅時代の僧侶である。彼は87種180余巻の著書を残したが、それらの著書は中国と日本にも大きな影響を及ぼし、７世紀以来の高僧の著作に絶えず引用されている。のみならず元暁は、弊衣をまとった乞食の姿をして民衆とともに踊りながら（無碍舞）布教した実践家でもあった。

25）近代期に元暁の再評価が起こるとともに「通仏教―元暁」に注目した学者として許永鎬・崔南善・趙明基などがいる。彼らはのほとんどは日本留学生であり、方法論的には近代仏教学を応用しながらも、植民国民としての民族意識を強く持つまま元暁に注目し始めた。拙稿「韓国近代における元暁認識と日本の通仏教論」（『東アジア文化交渉研究』第５号、2012年）を参照されたい。学問的に元暁を取り上げた論稿としては趙明基「元暁宗師の十門和争論研究」（『金剛杵』22号、1937）と「元暁の現存著書に対して」（『韓国思想』３号、1960）があり、その後、本格的な元暁研究者として李箕永が登場した。

26）鄭柄朝「勉強以外に価値を置いてなかった偉大な先生」、『法寶新聞』（2006年11月08日）。

李箕永が元曉研究を本格的に開始した1970年代には、元曉全集の類が刊行されており、韓国思想界全般にわたって元曉研究ブームが起こるようになった。しかし、李箕永の元曉研究には彼独自の目的意識が一貫して含まれている。彼は、なぜ元曉をそれほど尊敬し、人々に元曉のことを知らせようとしたのであろうか。

1）元曉の現実参加的仏教の再現

元曉は膨大な著述を残した学僧であると同時に、意図的に破戒し無碍舞という踊りを作って賤民の群れに交じって布教を行ったが、李箕永はそれを「理論と実践の調和」として、尊敬感を表わした。彼は、「韓国仏教史に在家仏教の位置が正当に評価されたのは新羅の元曉によってのみ」[27] といい、禪風が支配的であった韓国仏教界に在家仏教が強く位置づけられなかったことに不満を現わし、さらにそれが韓国仏教の風習になっていったのを絶えず指弾した。

> 仏教をよくわかっているという僧侶たちさえ、山奥で隠遁しながら参禅だけ重視しているし、世俗の大家が寺院を尋ねて来ることがあっても、僧侶たちは彼らを他力信仰の羈絆から外させ、真実の菩薩倫理を教えることを等閑視した。これが新羅末期から続いて来た韓国仏教の弱みであり欠陥である[28]。

実際に李箕永は、みずから「韓国仏教研究院」「元曉学堂」「在宅仏者会」「求道回会」などを創立し、そこで在家信徒（a lay person）たちに情熱的な講演も行ない討論を重ねた。特に元曉の註釈書の難しい漢字を現代語で分かりやすく解説し，日常生活と連関させようとした。彼は元曉の思想と実践を紹介しながら「もし元曉大師が今日に生まれ変わってこの時代の社会現実を見たら、果して如何におっしゃるだろうか」という。たとえば『元曉思想70講義』（韓国仏教研究院、1992年）を見ると、各章ことに元曉の論書から語句う抜粋し、これを現在社会の風潮と結びつけて解説する方式を取っている。

2）元曉の「和諍」：宗教間疎通，宗派仏教の超越

和諍国師とは、12世紀初期、高麗の肅宗が元曉に賜った諡号である。「和諍」の語は元曉の思想的特徴を象徴的に表現したものであり、元曉が「表面上は矛盾のように見える仏説や経典をめぐる多様な立場や異説間の疎通」を一貫して強調したことによる。李箕永はこれに基づき、元曉を通して「宗教間の疎通と対話」を論じた[29]。また、各仏教宗派の対立や偏狭さを拒否した李箕永は、元曉の和諍思想から「宗派超越の疎通の理念」を確認し、それを高く評価した。

27）李箕永『내 걸음의 끝에 마음이 있나니』（韓国仏教研究院、1997年）参照。

28）「社会病理の治癒――元曉はこのようにいうだろう」、『仏教と社会』、韓国仏教研究院、1999年。

29）李箕永「元曉思想において窮極的なもの-仏教と基督教、二つか一つか？」、『元曉思想研究』、韓国仏教研究院、1994年。

私は宗派仏教を好まない人間、いえ、好まないだけではなく宗派仏教をしてはいけないと思っている人間である。それがまさに元曉大師の教えであり、またブッタの教えでもある。釈迦が涅槃した後にいわゆる宗派が作られた……それで仏教をある宗派どある特定の経典に局限して考えたり信じたりするのは間違いである……『維摩経』はある一つの宗派の経典に限らないし、維摩宗というのもないので、安心してこの経を勉強しても良い。『維摩経』は「宗派」のようなことはしてはいけないと強く強調する経である[30]。

李箕永の元曉関連著書と論稿はきわめて多数にのぼる[31]。とりわけ『元曉思想』(円音閣、1967年)は、元曉の代表著述『大乗起信論疏別記』を現代的に訳註・解説したものであり、当時の仏教界だけではなく韓国人文学界に大きな反響を呼び起こしたベストセラーとなった。特に同書における李箕永の該博な解説と意訳が高い評価を得た。1968年ソウル市文化賞を受け、1970年ユネスコ 韓国委員会選定の「解放25年韓国10大名著」として海外に紹介された。李箕永はこの書物を筆頭に元曉関連研究書を多数刊行し、講義のテキストとして用いた。さらに元曉を主題とする学術会議の開催を主導し、国内だけではなく国外の多くの学者を招聘して元曉思想の宣揚に力を注いだ[32]。

写真3　元曉学国際学術会議(1994年)[33]

3　比較研究

比較研究を重視した李箕永の学問方法論は、その研究における著しい特徴として挙られる。彼は、博士学位論文において、仏教の懺悔とカトリックの悔改を比較してから、東西の比較宗教的側面に関心を持つようになった。 李箕永の友人であるHubert Durtは次のように述べている。

30) 李箕永『維摩経講義』上、『不燃李箕永全集』第25巻、韓国仏教研究院、2000年。

31) 李箕永『元曉思想研究』Ⅱ(韓国仏教研究院、575-583頁)。金浩星「テキストと現実の解釈学籍循環――不然李箕永の元曉解釈学」(『仏教研究』第26号、韓国仏教研究院、2007年)参照。

32) 李箕永『내 걸음의 끝에 마음이 있나니』、韓国仏教研究院、1997年。

33) 李箕永『내 걸음의 끝에 마음이 있나니』、韓国仏教研究院、1997年。

不然（李箕永）の研究は、（カトリックの）悔改と贖罪に相応する仏教の「懺悔」という宗教行為とその概念を原始仏教から5-6世紀の中国仏教に至るまで歴史的に考察したものである。これは、かなり宗教的であった彼には特別な意味を持つものであった。なお、ここからは、カトリックと仏教を行き来する彼の比較宗教学的関心の端初が窺える[34]。

李箕永の著述ではキリストやカトリックはもちろん、東西洋の多様な思想家がしばしば言及される。たとえば「元晓の一心とK. Jaspersの包括者」[35]の比較とか、「マルクス主義の挑戦と仏教の立場から見た対応策」[36]などがそうである。仏教が現代の学問と歩調を合わせるためには、周囲をよく理解し、胸襟を開かなければならないと考えた彼は、東西の文学や芸術も紹介しながら全方位的（crossover）議論を試みた。

このような傾向は、李箕永の学問に対する基本的信念にもとづくもので，彼は次のように述べている。

自分自身は決してある特定な小さくて狭い分野の専門家、人生全体を見ずに細かい問題だけを掘り下げる偏狭な人にはならないという心構えを持って生きている。私がこの哲学を学んだのはいつごろのことであったか。私が元晓思想を研究し始めてから……30年ほど経ったようだ[37]。

今日、「学」という言葉は、scienceを訳した略称のように聞こえる。何々「-logy」というのがまさにそれであろう。Indology、Sinology、さらにはSexologyまで登場した現代の学問は、凄まじい細分化の道へと進んでいる。集団と部分、人間と人間、人間と自然、これらの関係、すべてのものが研究対象として細分化されている……学者という人々は、各々一つの分野の知識だけは持ちながらも、他の分野の知識まで持つことはできないため、お互いに対話の場を失ってしまった[38]。

李箕永は、ある問題を論じる時には多様な領域をふまえて考えるという接近を試みた。この分野の論稿としては「釈迦とイエス」「東と西の思想」「仏教における清貧と謙遜」といったものが多数残されている。

四　実践：団体結成・参与仏教

李箕永の弟子であり韓国仏教研究院院長である李民容（1941-）は「李箕永・徐景洙、歴史와 現実에 参与하는 仏教를 苦悶하다」の中で、李箕永の仏教研究と実践について「徐景洙と李箕永は、近代的西欧の学問を通じて実践・参加・現場性を身につけた仏教学者であり、最近定着しつつある参与仏教

34）Hubert Durt「留学時節の不然回想」『내 걸음의 끝에 마음이 있나니』、韓国仏教研究院、1997年。
35）李箕永「元晓の立場から見るK.Jaspersのdas umgrei-fende」、『東国思想』 9、東国仏教大学、1976年。
36）李箕永「マルクス主義の挑戦と仏教の立場から見た対応策」、『北韓学研究』13、東国大北韓学研究、1983年。
37）『オリエント時報』（1992年11月）。
38）李箕永「学門의 길」『世代』、1968年12月（『내 걸음의 끝에 마음이 있나니』、韓国仏教研究、1997年、69頁）。

（Engaged Buddhism）の韓国的発端の道を開いた人物であった」[39] と述べた。

次に紹介するのは、李箕永と李鍾浩（当時の週刊部長）の対談「（対談）韓国仏教、来日을 向한 座標」（『週刊朝鮮』、1979年8月）の一部であり、ここから李箕永が韓国仏教研究院を創立した目的や信念が窺える。

> これからは我々の仏教も過去のように安逸に土窟の中で閉じこもってはいけなくなりました。それは、仏教の真理が現代の全世界に広く伝播・実現されることが要請されているし、その現代性が認められているからであります。したがって私は、これから仏教がうまく理解、普及、また実践されるようになれば、普遍的な一つの生活指針になるだけでなく、哲学的にも世界的に何らかの寄与ができると思っています。五年前、私が、韓国仏教研究院を立てたことも実は自分なりにこのような新しい仏教運動を起こすためでした。すでに仏教の真の価値をわかっている人々は、我々の仏教が古い因習的宗派主義、隠遁主義、無関心主義、形式主義、僧侶中心主義などを捨てて、思い切って変化し、まさに大乗的菩薩道の実践に進むべきだということをみなご存じです。新羅の円光法師、元曉大師、義湘大師、高麗の大覚国師、普照国師、朝鮮の西山、四明など多くの禅師たちが歩いて来た道とその中身を現代の状況に照らして再確立し再解釈して、この時代の進路を理論的にそして実践的に開拓して行かなければならないということです。

李箕永の仏教研究は常に現実と結びついていた。彼が中心となって結成された研究機関及び団体としては、韓国仏教研究院、求道会、元曉学堂、在家仏者会が挙げられる。

①韓国仏教研究院

1960-70年代の韓国仏教は、婦女子中心の祈福信仰の側面が強く認識されており、仏教基礎教理や仏教文化講座などに接する機会も少なかった。このような時に、1974年、「実践仏教・知性仏教」を標榜し、在家仏者中心の生活仏教の求心的役目を自任する韓国仏教研究院が設立された。当時すでに元曉研究の権威者であった李箕永と印度仏教哲学を大衆化した徐景洙（1925-2986）、韓国仏教美術史専門家の張忠植（1941-2005）、（現）韓国仏教研究院長の李珉容、（現）金剛大総長の鄭柄朝などが中心メンバーになって設立された[40]。 その後、当研究院は1988年11月に社団法人となった。

韓国仏教研究院は設立当時、韓国仏教に関する研究単行本の刊行、学術論文集『仏教研究』の出版、仏教学研修生指導、院刊『마음(こころ)』の発刊、国際学術交流会議開催、などを事業内容とし、「共同研究・共同修練・共同参与」をスローガンとして掲げた。そして韓国仏教の研究資料がほとんどなかった時期に『韓国の寺刹』（全20巻）、『海印寺高麗大蔵経解題本』、『三国遺事索引本』などを刊行した。当研究院は、研究委員会、元曉学堂、求道会及び出版部を運営しており、出版部は『不然全集』の刊行を筆頭として学術書および「木魚新書」を出版し仏教普及に寄与している。

39）李珉容「李箕永・徐景洙、歴史와 現実에 参与하는 仏教를 苦悶하다」、『仏教評論』50号、2012年。

40）1974年から李箕永が1～3代理事長、1997年1月から鄭柄朝が4代理事長、現在は李珉容院長が歴任している。

②求道会

韓国仏教研究院の設立とともに、その設立趣旨に同意する在家仏者たちを中心に求道会が組織された。1974年にソウル求道会、1976年に大邱求道会と釜山求道会、1990年に光州求道会、1999年に大田求道会が設立され、今でも全国仏教信行団体として発展している。また1989年には全国教師仏者会が、1991年には在家仏教会が設立された。

③元暁学堂

1988年、韓国仏教研究院の附設団体として大学や大学院課程に「元暁学堂」が新設された。仏教人才養成と元暁思想の普及を目的とするこの学堂は、今なお講演と法会を続けている。当学堂には学生だけでなく停年退職後の人々、あるいは職業をもたない一般人、研究を専門としない人が多く参加している。さらに、創立当時から「宗教間の壁崩し」という名目のもとに、仏教以外の宗教界の学者、たとえば監理教神学大学長である辺鮮煥が講義を行うなど、その方針を実践した。

これらの団体の活動は主に「経典講読、研究著書や刊行誌の発刊、在家仏教活性化、宗教間の疎通実現」を中心に行なわれてきた。現在の韓国仏教研究院長である李珉容は「僧侶と寺だけが仏教ではない」と宣言し、基礎講座を開いて在家仏者を熱心に指導している。これらの団体は韓国仏教界を導く原動力として働いているのである。

写真４　在家仏者会創立（1995.2.12）共同議長李箕永

写真５　韓国仏教研究院 講義（1977年）[41]

五　おわりに――現代韓国仏教と李箕永の仏教研究

2011年12月10日、李箕永15周忌追慕記念「東アジア仏教における近代性と不然李箕永の仏教・仏教学」国際学術大会が開催された。韓国近代仏教の近代性という問題を李箕永の学問と実践の中から照射するシンポジウムであった[42]。この大会で主に論じられた内容は、仏教学の近代性と西欧仏教学の流入、近代

41）［写真４］・［写真５］、李箕永『내 걸음의 끝에 마음이 있나니』、韓国仏教研究院、1997年。

42）発表者および発表題目は次のとおり。第１部〈東アジア仏教において近代性とは何か？〉：キムハンス（Duke Univ）

日本仏教の影響と韓国仏教学、李箕永の元暁研究方法論などであった。ちなみにこのような議論は、2000年代以後、韓国仏教学界で活発に取り上げられるようになった話題である。

近代以前まで、韓国や東洋仏教圏では、漢訳経律論を主とする講学と宗学が中心であり、修行の伝統を維持しながら一般生活の中で仏教を信仰してきた。ところが、これに反して、もともと仏教の伝統を持っていなかった西洋のイギリス・フランス・ドイツに始まる近代仏教学は、歴史・言語学者たちの古文献（経典）収集・文字解読と翻訳から始まった。この学風を日本あるいはヨーロッパから直接的間接的に受け入れた韓国仏教界の研究態度に対する批判的自己省察が起こっているのである。

西欧においても「修行と宗教性が剥奪された仏教学」に対する反省とともに、1800年代に西洋から提起拡散した「buddhism」という用語が持つ「buddha（仏）+ ism（主義）」の問題[43]、「Buddhist Scholar」（仏教内部人）と「Buddhist Studies Scholar」（仏教の内部外部とわず仏教研究を目標とする人）の弁別の必要性が議論されている。また近年、新造語として登場した「Buddhist Theology」（仏教＋神学）などは、オリエンタリズムの克服と西欧仏教学の研究方向を再検討しようとする一つの批判的視覚を反映している[44]。

李箕永は、長い仏教の伝統を持つ国に生まれ、仏教を客観化し主に学問の対象と見なした西洋で仏教研究の機会を得た。彼は「仏教への求道心と学問的接近の接点」「修行と学問の接点」というその「接点」に注意し、近代西洋仏教学の受容とアジア仏教文化の主体性の中間で均衡を維持しながら努力を重ねてきた人物である。この二つ側面が矛盾していないということを、元暁の「和諍」を借りて、また維摩居士とラモットの哲学と信念を借りて、人々に伝えようとしたのである。このように、李箕永の仏教研究を照射することによって、現代の韓国仏教界への示唆を多く見出すことができるように思われる[45]。

「仏教的植民主義: 1910年代の韓国円宗と日本曹洞宗の連合に対する新しい観点の可能性」、金永晋（東国大）「近代中国仏教における伝統の競争と改革」、許南燐（British Columbia Univ）「近代日本における仏教的帝国主義の根」。第2部〈不然李箕永における近代仏教と仏教学〉: 1）元暁研究史における不燃の学問的位相-Joerg Plassen（Bochum Univ）「概念からシェーマへ；元暁修行に対する補完的接近の序論」、南東信（ソウル大）「元暁研究史の批判的検討と不然」、丁永根（ソウル市立大）「不然李箕永の韓国仏教研究—その特徴と意味」2）不然においての人文学的—実践的仏教接近—ハンザキョン（梨花女大）「李箕永の東西事由比較考察: 仏教の한—마음（一心）とキリスト教の한—님（하나님）の比較」、張錫万（韓国宗教文化研究所）「buddhism、仏教、不然の仏教学」、ユスンム（中央僧伽大）「不然の社会参加理論と実践に対する批判的検討」。なお、2006年11月には韓国仏教研究院主催の「李箕永10周忌追慕記念学術セミナー」があった。

43）「buddhism」という用語は、1801年『oxford english dictionary』で「buddhism」「boudhism」として収録され、初めて用いられた。その後、buddhismという用語は一般化されたが、この用語を前時代の遺物であり、-ism（主義）というのは誤謬であると見なす人たちは「buddha + alogy（仏学）」あるいは「dharmo + alogy（仏法学）」で直して用いることを主張している。

44）李珉容「西欧の仏教理解の枠の転換—Buddhist Theologyの試図と展望」、『仏教評論』45号、2010を参考されたい。

45）現在。韓国仏教界には、趙性沢の『仏教と仏教学』（돌베게、2012年）、沈載寛の『脱植民時代我々の仏教学』（책세상、2001年）など、このような議論が多くの注目を集まっている。